

言うなら自分を言われるなら相手を棚に上げて

第10期OB 石井 隆太

大学院生活も2年目に突入して、以前よりは、研究活動も教育活動も上手くこなせるようになってきたように思います。その一方で、昨年、私は新しい研究に取り掛かったため、インタビューに出かけて、アンケートを送って、データを分析して、そして、研究が進んだら学会で報告して、それを修士論文にまとめてといった一連の過程で、自身の未熟さを多々痛感しました。授業発表や学会報告、インタビュー調査を通して、学内外の先生、大学院生、実際に企業で勤務されている方から、沢山の有益な意見やアドバイスを頂戴することで、何とか乗り越えられた1年だったと言えるでしょう。

ところで、他人から否定的・批判的な意見をもらったり、他人に自分の不出来を怒られたりした時、「そう言うあなたは出来るの?」、「不出来なお前に言われたくない」といった反発心を抱いた経験があるという人は、少なくないかと思います。所謂、「自分のことを棚に上げて言いやがって」というやつです。上司や同僚、家族、あるいは、恋人とのトラブルの種になりうる心情でしょうか。

でも、よくよく考えてみれば、常に問題なのは、言う側ではなく言われる側です。言う側が出来るのか出来ないのか、そんなことは関係ありません。言われる側の出来ないこと・言われる側には足りない部分こそが問題なのです。そもそも、「自分のことを棚に上げて」が、「自分の欠点・不出来をひとまず置いておいて」を意味するのであれば、自分のことを棚に上げずして他人に物申すなんてことは、不可能でしょう。というのも、どんな人であれ、欠点の1つや2つは間違いなくあるからです。他方で、仮に物申せたとしても、自分のことを棚に上げ切れていないために自信を失って、他人に物申す際に、話の冒頭に「あくまで個人の見解ですが...」を付けてみたり、話の末尾に「...だと私は思います」を付けてみたりするのは、自身の主張を曖昧にしてしまうので良くないかもしれません。

言う側が当然の如く自分のことを棚に上げているならば、言われる側は相手のことを棚に上げて、相手の意見を真摯に聞くというのが筋な気がします。誤解を恐れずに言うならば、所詮、人間は自分が一番かわいいので、他人の人生にも、他人の話にも興味がありません。それにもかかわらず、言う側は、時間と労力を使ってこちらの主張を理解し、それを頭の中で整理して、その上で意見やアドバイスを言ってくれるのだから、言われる側は、下手な反発心を持たないで、それを真剣に受け止めておくのが良さそうです。

一般的に大学院生は、他人との交流が少なくなりがちと言われますが、生身の人間との交流なくして、自身の研究や、あるいは自分自身を鍛えることは出来ません。来年度、私は、博士課程に進学予定ですが、意見を求めるのであれば、相手のことを棚に上げて相手の話に耳を傾け、逆に意見を求められれば、自分のことを棚に上げて明確に見解を述べられるよう心がけつつ、鍛錬して参りたいと思います。